

# 幸府画報

第 16 号

2023 年 1 月  
(令和 5 年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 父・秋圃と子・梅圃の風俗図絵巻

齋藤秋圃生誕250年特集(5)

齋藤秋圃作《十二月風俗図絵巻》

筆者の勤める九州歴史資料館が所蔵する《十二月風俗図絵巻》(図1)は、秋圃が70歳の時、すなわち天保12年(1841)頃の作品です。12の場面に、1年の12か月の風俗を描いており、それぞれに筑前の歌人・小金丸金生の和歌が添えられます。月々の歳時を描いた絵画は月次絵と呼ばれ、古くは平安時代に遡るとされますが、江戸時代には風俗描写とともに描かれることが多くありました。秋圃のこの作品も、1月の海と富士、4月の時鳥、10月の紅葉と鳥居などの風物の描



図1 齋藤秋圃作《十二月風俗図絵巻》部分(7月)  
紙本着色 卷子装 1巻 28.0×1143.0cm  
天保12年(1841)頃 九州歴史資料館蔵



図2 齋藤梅圃作《風俗図絵巻》部分(大黒舞)  
紙本着色 卷子装 1巻 31.8×830.7cm  
幕末~明治初期 九州歴史資料館蔵



図3 同上 部分(桜の枝を持つ一行)

を受けます。秋圃には真贋の判断の難しい作例が多く、また、工房作として息子の梅圃らの関わった作品もあることが想定されています。このように、真筆とみられる父子の作を比較してその違いを明確にし、それぞれの画風を見極めていくことが、これからの秋圃・梅圃研究で大切な作業となるでしょう。(日野綾子)



吉岡拜山作《梅花扇》筑紫女学園大学蔵

の揮毫をし、日々5~600本を販売したとあります。とりわけ、拜山が揮毫した梅花扇の売れ行きは好調で、この扇を使いながら大祭を楽しむ人の姿も少なくないかと記されています。(高松麻美)

写に加え、2月の二日灸、3月の潮干狩り、5月の競べ馬、6月の夕涼み、7月の盆踊り、8月の放生会、9月の菊見、11月の報恩講、12月の年の市など、市井の人々の風俗を季節とともに表したものとなっています。モチーフは勢いのある筆で軽快に描かれ、淡く施された彩色が潇洒な印象です。形態描写や画面構成の巧みさからは、秋圃の画技の高さがうかがえます。秋圃の数多い作品のなかでも、優作のひとつと云ってよいでしょう。

#### 新出の梅圃作《風俗図絵巻》

こちらに加え、最近当館の所蔵品に加わったのが、秋圃の息子、梅圃の描いた《風俗図

絵巻》です。16場面ほどで構成され、詳細な画題はまだ検討中ですが、冒頭に門松が表され、大黒舞(図2)の描写があることから、松籬子などの正月に関わる芸事を描いたものかと考えています。武士、修験者、ひよつとこの面を被った人物、猿まわしなど多彩な人物が描写され、なかには酔っているのか地面に寝転ぶ人物(図3)などもあることから、芸能だけでなくそれに興ずる人々のお祭り騒ぎも含め表現しているのかもしれない。鮮やかな彩色が特徴です。

#### 父子の人物表現の違い

風俗を描いたふたつの作品から、父子の人物の描き方を比べてみましょう。まず、人物の弾むような躍動的な表現が双方に見受けられます。踵を尖らせ足先を2つに割る、足袋をはいた足の描き方などもそっくりで、梅圃が父の絵画表現を受け継いでいることが分かります。ただこのふたつの作品に見るならば、梅圃の人物はやや体の動きが固く、面貌表現もより細かく描き込まれており、彩色の濃度の違いも相まって、秋圃の軽妙な画風とはやや異なる印象

#### メイショメイブツ

菅公一千年祭記念の梅花扇

絵師たちは求めに応じ、あるいは自ら進んで、記念品として色紙や扇などに揮毫することがあります。例えば吉岡拜山は、明治35年(1902)3月20日に太宰府滞在中の文豪・森鷗外へ書画扇を贈っています。飾るだけでなく、日常使いもできる扇は揮毫する品として特に好まれたのか、同年3月25日から太宰府天満宮で行われた「菅公一千年祭」において、拜山の扇が大変な人気を博した様子が記録に残っています。

菅公一千年祭は、菅原道真の没後千年という節目に全国の天神社で行われた祭事で、太宰府天満宮でも約1か月間に及ぶ大祭が行われました。奥園の興行地では生人形や活動写真のほか、多くの小屋掛けがなされ、周辺が賑わったと言います。雑誌『風俗画報』(増刊号250号)によると、そうした中で拜山は「菅公頌徳碑」建設費用を集めるべく、発起者である文人らと境内に設けられた場所で梅花扇の揮毫をし、日々

# 逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

齋藤梅圃作

## 【金時図絵馬】

梅圃12歳のデビュー？作

片手で大きな木の棒を持ち、果物を頬張りながら2頭の熊をあしらう腕白ぶりの男の子。前掛けの「金」の文字から、昔話や童謡などでおなじみの坂田金時、すなわち金太郎（金の幼名）であることが分かります。

作者は齋藤秋圃の3男で画業を継いだ梅圃（1816〜1875）。画面向かって左上に署名があり、文政10年（1827）に12歳で描かれたものとわかります。わずかに十数件が確認されるばかりの現存作品中、もともと若描きの作品で、梅圃が幼い頃から絵筆を握っていたことを示す逸品です。



梅圃作《金時図絵馬》板地着色 1面 103×138cm  
文政10年（1827）嘉麻市・馬見神社蔵

## 旧秋月藩内の名社の絵馬

この絵馬が掛けられているのは、朝倉市と嘉麻市にまたがる馬見山の北麓にある馬見神社の拜殿です。馬見神社は、もとは馬見山山頂近くの巨岩を祀る神社の下宮として、源為朝によって平安時代に建てられたという由緒があり、拜殿内には数多くの古い絵馬が所狭しと掲げられています。梅圃の絵馬と同じ年に当時の才田村から奉納された父秋圃の《相撲図絵馬》も掲げられています。当時神社周辺の一帯は秋月藩の領内で、秋圃は同藩お抱え絵師として現役だった頃の頃でした。

## 子どもつながり

文字の一部は消えかかっていますが、金太郎の左足あたりの部分に「當邑<sup>（当地）</sup>子供中」と墨書があり、当地の子どもたちが願主となって奉納された絵馬であることがわかります。祈願の内容は不明ですが、同じ文政10年奉納の絵馬が、秋圃、梅圃の絵馬のほかに3面もあり、地域や神社に何か大きな出来事があったのでしょうか。そして一連の奉納事業に際して、少年梅圃が子どもたちの絵馬制作を担当することになったと想像されます。



秋圃作《相撲図絵馬》板地着色 1面 160×194cm

おおらかさが感じられ、金太郎や熊のユーモラスな表情には、梅圃が父によく学んでいることがうかがえます。（井形栄子）

いちまい 画稿鑑賞

## 齋藤家資料 【演能図】

齋藤家資料の画稿類のなかで、能狂言に関する画稿下絵は30件ほどを数え、その画稿のなかに4件の《演能図》があります。そのひとつ、2枚の紙を継いだ淡彩の画稿をみていきます。



紙本墨画淡彩 46.1×40.0cm

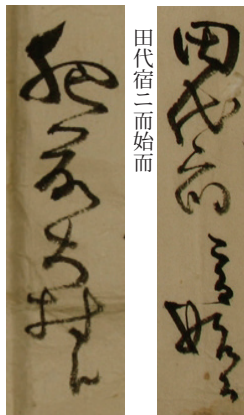
演者は女性の面をあて、やや前屈みに眼の前に置かれた小さな台車をみています。能装束には「白」「百六」「ゴン」「泥（金泥）」などの色注があり、淡く刷かれた絵の具とともにその優美さをうかがうことができます。またよくみると、右手の扇子に松樹が、台車の水桶に「銀泥」の色注とともに波頭がえがかれています。このあとこの演者が手にもつ扇子で潮を汲む仕科<sup>（しごき）</sup>にうつることを予感させます。演者の姿態は重ね着の装束のなかにありますが、その骨格はゆるぎなく、たしかに人が演じていることをしめています。このように少ない線描で、人の動きをその体軀まできちんと表すこと、齋藤秋圃のもっとも得意なところかと思えます。なお能の演目は「松風」。松風、村雨姉妹の在原行平をめぐる恋の物語です。（橋富博喜）

ひとこと ぐずし字

## 【而・江・二】

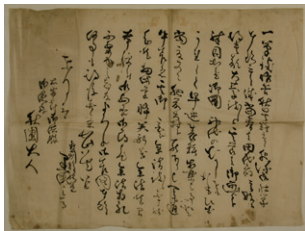
古文書の文中には他の文字より小さく書かれた字が時々あります。こうした文字の中には助詞の役割を果たしているものもあり、しっかりと読まないとい意を把握できません。

今回紹介するのは「而」「江」「二」。それぞれなんと読むかわかりますか？右の画像は「二而」と「而」が小さく書かれており、



田代宿二而始而

肥前大村江



秋圃宛書状より馬主瀬黒 齋藤家資料

この画像の文書は伊勢神宮の信仰を広める御師の黒瀬主馬が齋藤秋圃に宛てたもので、春に田代宿（今の鳥栖市）で秋圃と会い絵を贈られたことを喜び、夏には肥前大村（今の長崎県大村市）に行くことが記されています。（木村純也）